

金 融 市 場 動 向

— 平成 6 年 2 月 —

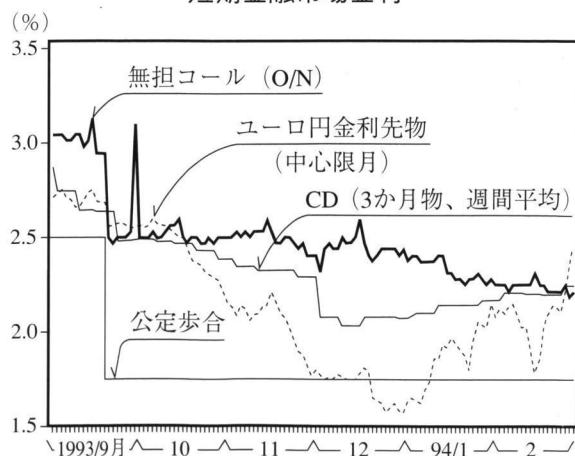
(平成 6 年 3 月 15 日)

1. 短期金融市場

2 月中の無担コールオーバーナイト・レートは前半ほぼ横ばいで推移した後、下旬にかけてわずかながら低下した一方、CD（譲渡性預金）3 か月物レートは月末にかけて3月の期末越え資金を手当てする動きが散見されたこと等からわずかに上昇した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）については月央に低下した後、月末にかけて大幅な上昇を見た。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は45兆1,015億円と前月（46兆2,365億円）を下回った。

短期金融市場金利



2. 資本市場

2 月の長期国債利回り（157回債）は、中旬に為替が円高に振れ株価が下落するなかで低下したが、その後は需給悪化懸念や米国長期金利上昇等を背景に上昇に転じ、3.605%で越月した（前月末3.540%、国債先物中心限月は4.349%＜前月末4.128%＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。

株式市況（日経平均株価）は、月央にかけての急速な円高等を嫌気して下落したものの、その後月末にかけては外国人投資家の買い等からやや値を戻し、結局19,997円で越月

既発債市場利回り
— 国債市場 —



(注) * 11月25日以前は145回債。

した（前月末比△232円）。また、株式出来高（東証第一部月中1営業日平均）は4.27億株と前月（3.96億株）を上回った。



起債動向をみると、長期国債（6年物＜公募入札発行は今回が初回＞）は、月央にかけて為替円高を背景に債券相場が堅調に推移していたこと等から好調な入札となった（2月15日入札分は募入平均利回り3.255%、応募倍率3.19倍）。中期国債（4年物）は、上旬入札実施分については概ね順調な入札となった一方、下旬入札実施分については債券相場が不安定なことからかなり低調な入札となった（2月9日入札分は募入平均利回り2.796%、応募倍率1.72倍、2月24日入札分は募入平均利回り3.137%、応募倍率0.92倍）。短期国債は6か月物、3か月物とも総じて低調な入札となった（2月4日入札分＜6か月物＞は募入平均利回り2.087%、応募倍率1.75倍、2月16日入札分＜3か月物＞は募入平均利回り1.969%、応募倍率1.56倍）。

2月の国内公募普通社債は中旬に債券相場が持ち直す局面での発行がみられ、月中では

4,250億円の発行となった（1月は発行ゼロ）。

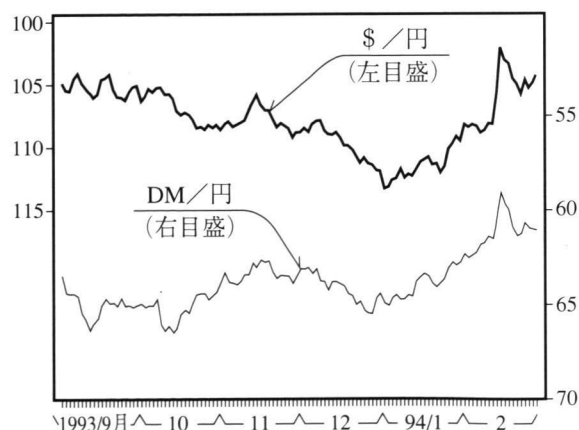
また、国内エクイティ市場での発行（2月払込み分、増資を除く）は前月を大きく上回った（1月400億円→2月2,760億円）。

3. 外国為替市場

2月の円の対米ドル直物相場（終値）は、月初108円で寄付いた後、月央に日米経済包括協議の不調等から一時102円台まで急騰し、結局104.30円で越月した（前月末109.55円）。また、円の対マルク相場（東京市場、終値）は対ドル相場につられる展開となり、15日には59.08円と史上最高値を更新し、結局61.07円で越月した（前月末62.84円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は180.1億ドルと、前月（175.3億ドル）を上回った。

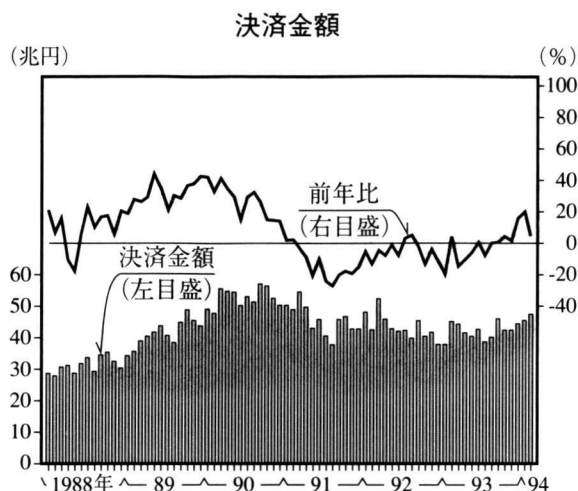
外国為替市場



4. 決 済

2月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京、前年比△12.5%）は前年同月を下回った一方、全銀システム取

扱高（前年比+12.6%）、外為円決済交換高（同+10.5%）はそれぞれ前年同月を上回った。また、国債の決済金額（1営業日平均）については移転登録（同+12.7%）が前年同月を上回った一方、振込口座振替（同△23.6%）は前年同月を下回った。



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

2月の資金需給をみると、銀行券要因が7,267億円の不足（前年同月5,692億円の不足）となったのに加え、財政等要因も、源泉所得税を中心とした税揚げに加え国債も大幅発行超となったことから、9,376億円の不足（同2兆2,479億円の不足）となった。こうしたことから全体では1兆6,643億円の不足（同2兆8,171億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行は手形買入れ等により資金を供給した。

3月の資金需給（国債発行織り込み前）をうかがうと、銀行券要因については、月中1,000億円程度の不足（前年同月5,279億円の

余剰）となる見通しである一方、財政等要因は、公共事業関係費等の年度末払いを中心に8兆200億円程度の余剰（同7兆312億円の余剰）となる見通しであり、全体では7兆9,200億円程度の資金余剰（同7兆5,591億円の余剰）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

1月のM₂+CD平残前年比伸び率は+1.6%と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。通貨種類別にみると、CDの伸び率が低下した一方、預金通貨、準通貨の伸び率は上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.0%と前月に比べ0.1%ポイント上昇した。

2月の銀行券平残前年比は+4.6%と前月を上回った。

2月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+1.6%と、前月に比べ0.1%ポイント伸び率を高めた。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+0.5%と4か月連続で既往ボトムの水準にとどまった。

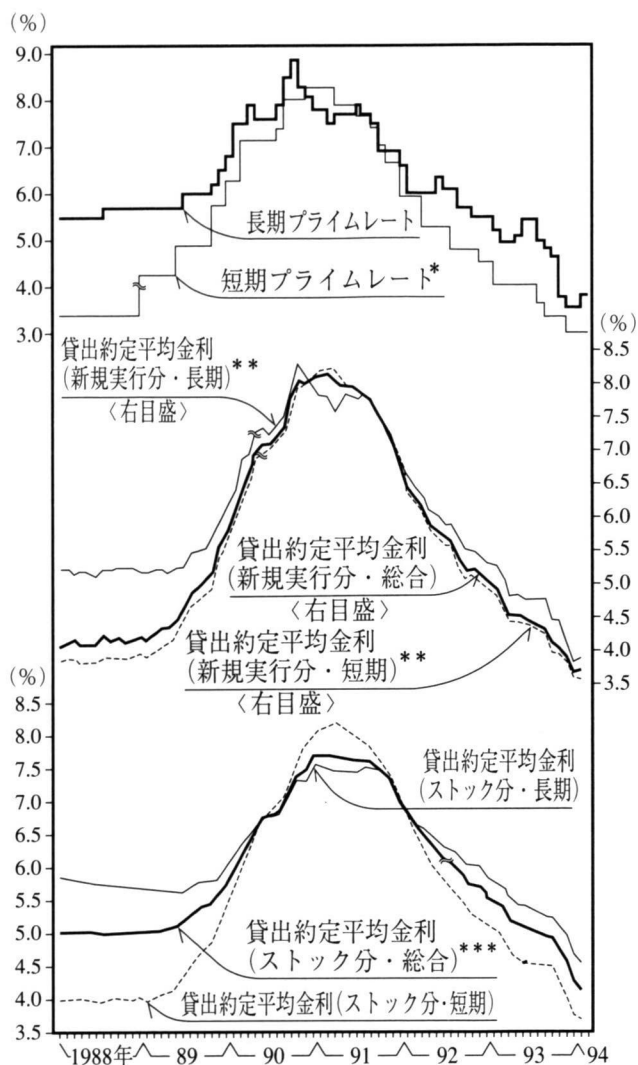
7. 貸出・預金金利

1月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、長期が長期市場金利の上昇等を背景に小幅ながら上昇した（前月比+0.043%）一方、短期は小幅の低下となり（同△0.013%）、前月に引き続き既往ボトムを更新した。この結果、総合はわずかに低下傾向を持続し（同△0.008%）、3か月連続で既往ボトムを更新した（12月3.661%→1月3.653%）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越、総合ともに引き続き低下し（短期：前月比 $\Delta 0.080\%$ 、長期：同 $\Delta 0.095\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.077\%$ 、総合：同 $\Delta 0.083\%$ ）、短期、長期、総合ともにそれぞれ既往ボトムを更新した（総合：12月4.414% \rightarrow 1月4.331%）。

この間、1月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比低下した（12月1.957% \rightarrow 1月1.904%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行のなかで最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)